

2025 年 IOM クラス選手権 参戦記

J-853 筒井大和

○大会について

日にち：2025 年 10 月 12 日（日）・13 日（月祝）

場所：竜洋 B & G 海洋センターしおさい湖

参加者：14 名（関東支部 8 名、中部支部 4 名、西日本支部 2 名）

○レースレポート

～風と仲間に生かされた一日～

朝から空気が張りつめていた。

全国から集まった選手たちの表情には、いつもの練習会とはまるで違う緊張と覚悟が漂う。

会場の風は軽く、しかし時折ふっと強く吹き抜ける。――まるで、この大会の難しさを予告するかのようだった。

【スタート前のアクシデント】

スタート時間が迫る中、私の艇に異変が起きた。

セールサーボから突然、白い煙が立ち上る。

「うそだろ…!？」一瞬、頭の中が真っ白になる。

ノーコントロール―舵も効かず、セールも動かない。目の前が暗くなった。

予備はない。交換パーツもない。

残り時間はわずか。普通なら、ここで終わりだった。

だが、そこからが本当のドラマだった。

すぐに周囲の仲間たちが動いてくれた。

「これ使いな！」

兄貴分の八木さんが、予備セールサーボを差し出してくれた。

平尾さんは「これ入るんじゃないか？」と駆け寄り、望月さんも「これ試してみよう」と手を貸してくれた。

その一つひとつの言葉と動きに、“仲間って本当にありがたい”と感じた。

だが、現実は甘くない。

形状が微妙に合わず、なかなか装着できない。

スーパーメカニック吉田さんも工具を片手に奮闘してくれたが、サーボはなかなか収まらない。

時間だけが過ぎていく。

そこに現れたのが、“2025 DF65 チャンピオン 池松さん”。

海外レース経験豊富な彼は、詰め替えや緊急修理のトレーニングを積んでいる。

黙って私の艇を受け取り、慣れた手つきで作業を始めた。

数分後、「入ったよ！これで戦えるねw」と短く一言。

その瞬間、セールが動いた。周りから流石の歓声があがる

そして、最初からずっと寄り添い、声をかけ続けてくれたのが東さんだった。

「焦るな、大丈夫。間に合うから。」

あの言葉がどれだけ救いだったか分からない。

私は仲間たちの力を背負い、スタートラインに立った。

運営も状況を理解し、少しだけ時間を与えてくれた。

「ダメなら諦めよう」と思っていたが、その温かい判断がすべてを変えた。

感謝の気持ちと、負けられないという想いが入り混じる中、いよいよレースが始まった。

【第一レース】 西北 1-3m

ヒートマネージメント方式。

上位 2 名だけが A ヒートに残れるという、まさに「初戦から落とせない」展開。

「1 位はいらない。まずは生き残る。」

自分の中で明確な戦略を立てた。

スタートは無理せず、クリーンサイドから。

攻めない代わりに、確実に 2 番以内を狙う“堅いレース運び”に徹した。

スタート音が鳴る。艇が一斉に風を受ける。

波の間を縫うように走り出す中、私は冷静に風を見て、リスクを避けた。

焦らず、ミスせず、確実にマークを回る。途中 1 位も走るが

結果は 2 位フィニッシュ。

思わず、深く息を吐いた。

その瞬間、こみ上げてきたものがあった。

この原稿を書きながら、改めてスタート前のメカトラ解消 あの時の光景を思い出し――涙が出ました。

あのスタートラインに立てたのは、間違いなく仲間たちのおかげでした。

「第二レースに挑める！」

あの瞬間、胸の奥から湧き上がる安堵と感謝。

仲間の力に支えられた、自分のレース人生の中でも忘れられない瞬間だった。

【第二レース】

ここからはさらに厳しくなる。

下位 4 艇が B ヒートへ落ちるルール。

つまり、A ヒートに残るためには上位 6 位以内が絶対条件。

「崩さない」「焦らない」「残る」――この 3 つを頭に刻んで挑んだ。

スタートは無理せず、風の変化を見極めながら確実にポジションをキープ。

中盤はやや混戦となったが、無理をせず粘りの走り続けた。

結果は 5 位。

決して満足ではない。だが、悪くない。

ボートスピードも安定しており、初日のリズムとしては理想に近かった。

一方で、池松選手が見せたスピードは圧巻だった。

1・4 フィニッシュ。まるで他艇を寄せつけない走り。

「明日はこの方とマッチレースできるように。」

そう静かに闘志を燃やした。

【第三レース】

初日の最終ヒート。

「とにかく A ヒートで折り返す」——この思いだけで集中した。

風は少し落ち着きを見せ、艇の挙動も安定している。

ここでも焦らず、丁寧にマークを回る。

無理をせず、確実に順位を守る展開に徹した。

結果、2 位フィニッシュ。

初日を総合 2 位で終えることができた。

池松選手は 1・4・1 の 6 点、私は 2・5・2 の 9 点。

数字上の差はある。しかし、まだカットレースが残っている。

そして何より、自分の心がブレていない。

「明日も戦える」——その確信が、静かに胸に灯った。

【初日を終えて】

思えば、スタートすら危うかった朝から、よくここまで辿り着けた。

機材トラブルを助けてくれた仲間。

焦る私を励まし続けてくれた東さん。

技術と経験で救ってくれた池松さん。

その全ての力が合わさって、ようやくスタートラインに立てた。

この日ほど、仲間の存在を強く感じた日はない。

そして、焦らず崩さず、堅実に走り抜いた自分を少しだけ誇りに思う。

——“風と仲間に生かされた一日”。

これが、私の IOM 選手権・初日のすべてだった。

【第 4 レース】 北北西 2-5m

～勝負の二日目、慎重から攻めへの転換～

二日目の朝。

昨日の学びが体の芯にまだ残っていた。

初日第一レースの重要性を痛感していたからこそ、

「今日の最初の 1 本」も絶対に崩せない——そう強く意識していた。

私はこれまで、1 レース目で心が揺らぐことが多かった。

マインドが弱く、想定外の展開になるとペースを乱してしまう。

だから今回は、“設計通りに走ること”を最優先にした。

「焦るな。攻めるな。崩すな。」

この 3 つを胸に刻み、スタートラインに立った。

風は穏やか。

初日と同じく、クリーンサイドから安全にスタート。

落ち着いて風を読み、冷静にマークを回る。

艇の動きもリズムも悪くない。

そして、第一レグから流れを掴み、そのまま集中を切らさず走りきった。

結果——**1 位フィニッシュ**。

「よし、崩さなかった。いや、今日はついに掴んだ。」

胸の奥から静かに込み上げる感情を噛み締めた。

しかし、喜びの裏で一つの思いが過った。

これまで池松選手の前でフィニッシュしたことがなかった。

今日、ようやくその背中を抜けた——けれど、3 位フィニッシュまだ差は小さい。

この一勝で油断すれば、すぐに差は広げられる…

それほど、彼は強く、そして“しぶとい”。

そこに 4 レース終了時点で“1 カット”が発生。

「いける。ここから勝負だ。」

守りのマインドを捨て、攻めの気持ちに完全に切り替えた。

この瞬間から、自分の中で何かが“変わった”。

風は終日安定している。

「3 時までには十分勝負できる。」

そう判断し、私はこの勢いのまま攻めのレースを続ける決意を固めた。

慎重に始まり、攻めで締めた第 4 レース。

それは、私にとって“勝負の一日”が本当に動き出した瞬間だった。

【第 5 レース】～赤い彗星との真っ向勝負～

いよいよ、池松選手との直接対決。

ここまで我慢してきた“守りの走り”はもう終わり。

ここからは、120%攻める。自分の中のリミッターをすべて外すと決めた。

スタート前、視線の先にはあの赤いハイル。

全国の誰もが知る、圧倒的な安定感と勝負強さを誇る艇だ。

私はあえて、彼のすぐ近くからスタートすることを選んだ。

「避けるんじゃない、挑みにいく。」

心の中でそうつぶやき、スタートラインに立った。

ファーストタックの位置取りを慎重に見極めながらも、

風を感じ、直感を信じて攻めた。

スタートのタイミングは完璧。艇が走り出す。

この瞬間、体中が熱くなった。

――しかし、その数十秒後。

視界の端で、赤いハイルがふっと消えた。

まるで彗星が流れるように、一瞬で遠ざかった。

「まさか……？」

池松選手の艇が不運にもゴミを拾ってしまった。

スピードを失い、なす術なく減速。

まさに“赤い彗星”にとっては痛恨のアクシデントだった。

けれど、これは選手権。情けをかける場所ではない。

風も運もすべてを味方にできる者が勝つ——それがレースだ。

私は迷いを断ち切り、全力で走り抜けた。

冷静に、でも心の中は燃えていた。

「このチャンスを逃すな。絶対に 1 位を死守する。」

艇は順調に伸び、マークごとにリードを広げていく。

そして、ゴールラインを真っ先に切った。

このレースで、ついに池松選手を**得点で逆転**。

初日から追い続けた背中を、とうとう抜いた瞬間だった。

一方で、池松選手は B ヒートへ。

不運にも、ここでもまたゴミの襲撃を受け、A ヒートへの復帰が叶わなかった。

それでも私はわかっていた。

「この人は必ず這い上がってくる。」

そう思えるほどの実力者だ。だからこそ、気は抜けない。

【第 6 レース】～静かなる集中、そしてターゲットの切り替え

～

第 6 レース。

池松選手は前レースで不運なアクシデントにより、A ヒートへの復帰が叶わなかった。

この瞬間、優勝争いの構図は大きく変わった。

ただ、ここに深入りするつもりはなかった。

レースはレース。風と運、そして自分自身との戦いだ。

私はここから、1 レースごとに点数を冷静に計算しながら進めることにした。

「1 カット、2 カット」を想定し、残りのレースをどう積み上げるか。

焦りを抑え、頭の中でシミュレーションを繰り返す。

そして、新たなターゲットを定めた。

——19 号艇・竹本選手。

初日は風に翻弄されていた彼だが、さすが元会長であり、世界を知るジェントルマン。

この日になって調子を上げ、まるで別人のような走りを見せていた。

私は直感的に感じた。

「このままでは、次に来るのは竹本さんだ。」

そこで戦略を切り替えた。

とにかく 19 号艇の近くを走る。

一つ前でも、一つ後ろでも構わない。

彼と同じ風を読み、同じラインで展開を作る。

スタートでは、黄色いマンゴー艇のすぐ近くからポジションを取った。

風を感じながら、竹本選手の動きを見逃さないように意識を集中する。

中盤で順位が変動しても焦らず、とにかく「19号艇のそばにいること」。

それだけを自分の任務とした。

終盤、わずかな風の振れを逃さず、一步前に出る。

そしてフィニッシュライン。

結果は――私（21号艇）が先行、竹本選手が4位。

数字で見れば小さな差かもしれない。

しかし、心理的には大きな一步だった。

この時点で、私はすでに優勝を強く意識し始めていた。

無理に1位を狙う必要はない。

崩さず、守り抜くことが最も賢明だと理解していた。

「ここからは、冷静に積み上げるだけ。」

そう心の中で呟き、風の音を静かに聞いた。

――第6レースは、攻めでもなく守りでもない。

“勝利を確実に引き寄せるための、静かな戦略レース”だった。

【第7レース】～勝負を決めた、静かな集中と解放の一戦～

第7レース。

引き続き、私は19号艇・竹本選手を強く意識していた。

同時に、この日じわじわと安定した成績を重ねている59号艇・平尾選手、

そして爆発的な走りで会場を沸かせていた兄貴分・39号艇の八木選手。

この三艇が明らかに勢いを増しており、視界の中から一瞬も外すことができなかった。

私は、この時点でおそらく「全 8 レース」が行われるだろうと予測していた。

つまり、2 カットが入る。

そう仮定すると、残り 2 レースのうちどちらかで勝負に出ても、

仮に崩れても一つはカットできる——そう冷静に計算していた。

「この第 7 レース、勝負をかけるならここだ。」

そう決意し、スタートラインに立った。

風は穏やかだが、読みにくい。

一瞬の判断が順位を左右する中で、私は自分の“型”を信じた。

無理にリスクを取らず、しかし攻めるべきタイミングでは一気に前へ出る。

そのバランスを研ぎ澄ませながら、レースを進めた。

第 1 マークを上位で回り、以降は終始安定した展開。

中盤では八木選手と並走する場面もあったが、焦らず風を読み、

下マークでわずかに前へ出る。

そして、そのままトップを譲らず——**1 位でフィニッシュ。**

ライバル 3 艇の前でゴールを切れたことは、

順位以上に大きな意味を持っていた。

このレースで得たポイントは、

カットに頼らず“優勝を確実に近づける一手”となった。

思い返せば、この第 7 レースだけは、

不思議と心が静かだった。

風の音、艇のきしみ、波の感触――すべてが鮮明に感じられ、

一番リラックスした状態でレースに臨めていたと思う。

勝負の緊張と、静かな自信。

その二つが共鳴し、心が研ぎ澄まされていた。

――この第 7 レースは、

私にとって「優勝を確信した」一戦であり、

“最後の風”を迎える準備が整った瞬間でもあった。

【第 8 レース】～静かなる勝利、そして集大成～

そして迎えた第 8 レース。

ここでは、私なりの“緻密な計算”が功を奏した。

第 7 レース終了時点で、すでに状況は見えていた。

第 8 レースが実施されれば 2 カットが発生する。

つまり、その時点で――**優勝が確定していた。**

もちろん、レース自体は最後まで全力で臨む。

しかし、心のどこかで「もう一步、冷静にこの風を感じよう」と思えた。

これまでのような焦りやプレッシャーではなく、

穏やかに、静かに、IOM 選手権という舞台を噛みしめながらスタートラインに立った。

正直に言えば、私は普段から“緻密に計算するタイプ”だとは思われていないだろう。

勢いで走り、感覚で勝負する――そんな印象を持たれているかもしれない。

だが、この時ばかりは違った。

したたかに、そして謙虚に。

勝つために必要な戦略を冷静に組み立て、

1 点の重みを噛みしめながらレースを進めた。

なぜなら、この大会だけは——どうしても優勝したかった。

JMYA のレースでは、これまで一度も入賞すらできなかった。

幾度となく挑み、悔しい思いをしてきた。

その積み重ねがあったからこそ、この瞬間の意味は大きかった。

この IOM 選手権を、最高の形で締めくくることができた。

感情を抑えながらも、心の中では静かにガッツポーズをしていた。

——「やっと掴んだ。」

風、仲間、運営、そして自分自身。

すべてに感謝しながら、

私はこの 2025 IOM 選手権を、誇りを持って終えることができた。

【総括・大会を終えて】～風と仲間に導かれた優勝～

この IOM 選手権を終えて、まず最初に浮かんだ言葉は——「感謝」でした。

思い返せば、初日の朝。

セールサーボから煙が上がり、ノーコントロール。

あの時、もし仲間たちがいなければ、私はスタートラインにすら立てなかった。

八木さん、平尾さん、望月さん、吉田さん、そして池松さん――。

それぞれが自分のことのように手を動かし、声をかけ、支えてくれた。

あの瞬間の“チームの力”こそが、この優勝の原点だったと思う。

そして、最初から最後まで寄り添い続けてくれた東さん。

焦る私に「大丈夫、間に合う」と声をかけてくれたその言葉が、

どれほど心を落ち着かせてくれたか計り知れません。

風のように静かで、そして確かに背中を押してくれる存在でした。

また、この大会を支えてくださった運営の皆さまにも、心からの敬意を。

コース整備、タイム管理、ヒート進行、どれ一つを取っても完璧で、

あの穏やかで公平なレース環境があったからこそ、

選手たちは自分の力を最大限に発揮できました。

そして、忘れてはならないのが“風”です。

レース中、私たちは常に風と対話をしていました。

穏やかに吹く風、急に振れる風、時に試すような風――。

それはまるで、勝負の神さま（故 山脇さん）が「お前は本気か」と問いかけているようでした。

この2日間、風は常に私たちの挑戦を見守ってくれていたのだと思います。

私にとってこの優勝は、単なる勝利ではありません。

挑戦し続けた年月、支えてくれた仲間、

そして“あの日の風”がすべてつながって掴んだ、人生のご褒美のようなものです。

これまで JMYA の大会で表彰台に立てなかった自分が、
ついに頂点に立てたという事実。
それは、努力や運を超えた“信頼と絆の証”だと思っています。

——風は、誰の味方でもない。
けれど、挑み続ける者には必ず微笑んでくれる。

この大会でそれを実感しました。

最後に、この場を借りて、すべての仲間、運営、そして風に——
心から、ありがとうございました。